

1 写真家 B T KIM氏の現地報告

(菊池徹の自己紹介)2002年9月文部科学省より国際交流ディレクターの委嘱を受けて ケニア ナイロビ に、2005年3月インドのニューデリーに赴任した。野生動物の生態に触れる機会を持った。野生動物の野生ならではの表情に魅了された。(5月3日(月)) NPO法人は 2008年7月発足。半年認可取得に要した。仕事は「展示会事業」「インドやケニアに関する啓蒙活動」。在外の日本人学校の派遣教員と共にその経験を活かす事。自然と野生動物の保護や環境の保全の環境が人類の生存にとって大切である事を訴える事をめざす。

(B T KIM氏の紹介)B T KIM氏は韓国の人でオフィスファニチャーの販売をする傍ら趣味の写真を撮っていた。はじめは風景写真を撮っていたがアフリカに来てから動物写真に転じた。現在南アフリカのヨハネスブルグとケニアのナイロビに在住。JICA も自然保護には関心を持っておられる。本日参観された多くの皆様のご意見をお聞きしたい。

2 B T KIM氏の報告

風邪をひいていてお聞き苦しい点をご容赦下さい。このような機会を頂きうれしい。菊池徹さんとは7年前に出会った。私は1988年から写真をはじめ1993年からアフリカの動物写真を専門に撮るようになった。

①野生動物の行動について1つのエピソードを紹介したい。ある時マサイマラ自然公園の一角でライオンの1集団が木陰で休んでいた。そこに1頭のインパラが近づいて来た。私はライオン達がインパラを捕らえるのではないかと危惧した。とても驚いた事にライオンは何の反応も示さずインパラはそこを通り抜けて行った。ライオンがどうしてインパラを殺さなかったのかと思ったがあとで考えるとその集団のライオンは空腹でなかったために襲わなかったという事に思いが至った。そこで私は動物には動物のルールに基づいて行動し人間のそれとは異なっている事に気づいた。そして野生動物に関心を持つようになった。

②次のエピソード ある時撮影している車のボンネットの上に1頭のヒョウが跳び乗って来た事があった。このヒョウは自分が被写体としてずっと追って来た個体だった。このような経過の中でヒョウも自分に親近感を持ったのかも知れない。このヒョウはその後去って行ったが車はオープンルーフなので一緒にいた運転手はたいそう怖かった。自分は言われるまでその怖さに気づかなかったがやはり自分とあのヒョウの間には親近感があったものと思っている。もしヒョウがフロントガラスを跳び越えて車内に入ろうと思えば出来る状態だった。ヒョウは 60kg位と大して大きくはないが極めて強力であり 100kg以上の動物をもしとめる事が出来る。ベストハンターとも呼ばれマサイ族はライオンよりも恐れる。もう少しヒョウについて話をしたい。ヒョウは獲物の首筋に噛みついてしとめるものである。獲物をしとめた時に出る血の匂いは他のハンターをも呼び集める事がある。このためヒョウは獲物を樹上に持ち上げてから食べるのである。サバンナでは 1)ライオン 2)ハイエナ 3)ヒョウ 4)チータ の順位で強い。チータは、獲物を 時速 110kmで追いかける。全速ではあまり長くは走れない。チータは獲物を捕らえた後すぐにそれを食べる事が出来ない。息を整えているうちにハイエナが近づいて獲物を奪い取られる事がある。ハイエナは嗅覚が発達していて他人の獲物に群がって来る。

③次の若いライオンの写真は今年(2010年)3月に撮影された。やせ衰えた姿である。このライオンは恐らく数日後には餓死したものであると思われる。ライオンのハーレムには、王がいる。獲物は先ず王が存分に食べる。干ばつでは、若いライオンにまで餌が回らない。

④毎年雨期になると 200万頭のヌー(野牛)の群がケニアのマサイマラにやって来る。このような時期にはライオンなどのハンターは幸せである。しかし乾期になるとこの大群はタンザニアのセレンゲティに移動してしまう。ライオンの雄は 約200kg 12才位まで生きる。雌は 約180kg 18才位まで生きる。ライオンは縄張りを持つ習性があり1頭のライオンの縄張りには数頭の雌とその子供がいる。最近数頭の雄がいるグループを見た。このような雄は兄弟で協力してグループを守っている。雄が王者の立場を維持出来るのは数年である。そこに他の若い雄が来て王を打ち負かすとその群れには混乱が起こる。新しい王は前の王の子供を殺す。抵抗すればその母親も殺される。その後雌の発情が起こり多くの子供が生まれる。子供は常に強い雄の血を引くようになる。これが自然の摂理である。このような事があるので雄のライオンの寿命は短い。雄のライオンらしく生きられるのは 5-6年である。多くの動物は肉食であれ草食であれ闘うものである。雌を求め食料を求めて闘うものである。

⑤エピソード3 ヌー(野牛)の大移動について。ケニア マサイマラ-タンザニア セレンゲティの移動の間に数本の川がある。1月 セレンゲティで子供が生まれ 6月の移動までの 5ヶ月間に子供は十分な大きさに育つ。自然は人間の想像を越える調整力を持っている。

⑥マサイ族の牛の話をする。ケニアは昨年干ばつに襲われた。マサイ族はその対応として自然保護区に彼らの牛を入れた。肉食動物には彼らの縄張りがありそこに来たマサイ族の牛も狙われる事になる。人間の側からすればこれらの肉食動物は害獣として排除される事になる。野生動物の敵は人間である。象牙 毛皮 サイの角を求めて野生動物は殺される。1980年代多くの野生動物が密漁で殺された。その後多くの国が協力して密漁を防止するようになって来た。

⑦今回の干ばつでは新しい問題が起こって来た。外国の援助もマサイ族が水を得られるような仕組みの提供が多い。ケニアには地下水がある。それを掘り出すには資金が必要である。もし十分な水が確保されれば人や家畜は自然保護区に入る必要はない。

私の写真の展示会は 2008年から行っている。人間は機械や 情報に囲まれて暮らしている。野生動物の写真を見て 自然の潤いを感じてもらいたいと思っている。